

序文

池内靖子

2011年度国際言語文化研究所連続講座「グローバル・ヒストリーズ—国民国家から新たな共同性へ」第2シリーズでは、「歴史のなかの感覚変容」というメインテーマが設定された。そのメインテーマのもとで組まれた4回の連続講座のうちの第3回目を担当した私たち（梁仁實、李文茹、大西仁、池内）は、「恋愛小説と映画をめぐる感覚変容—日韓台の帝国／植民地近代」に焦点を当てた。

このように、日韓台の帝国／植民地近代の歴史的な文脈にそくして恋愛小説と映画をめぐる感覚変容を取り上げたのは、私たちが言語文化研究所のジェンダー研究プロジェクトの一環として、また科研プロジェクトグループとして進めてきた共同研究として位置づけたためである。今回の連続講座では、梁、李、大西各氏が研究発表を行ったが、連続講座と関連する私たち科研グループのテーマ、視角、方法について触れておきたい。

私たちの科研プロジェクトの研究テーマは、「帝国／植民地近代とジェンダー—日本・韓国・台湾に廻流する文化表象を中心に」というもので、帝国日本とその植民地であった韓国・台湾を横断する文化研究の一環として、当時の日本・韓国・台湾における演劇・映画・小説等の表現メディアに焦点を当て、物語や身体表現、映像表現について、ジェンダー研究と植民地研究を交差させた複合的な視角から考察することを目指している。三地域に共通して流通した大衆小説やメロドラマの舞台化及び映画化に着目し、文化表象の混淆と差異化にジェンダー及びセクシュアリティの構築がどのように関連しているかを明らかにし、帝国／植民地近代における文化創造と交渉を理論的にとらえ直す文化研究モデルを提示するという野心的な目標を立てている。

ここ数年、この科研プロジェクトの研究代表者である池内は、アジア系女性アーティストによる身体表現を基盤とする演劇／パフォーマンス・アートについて研究してきたが、特に重点をおいて進めてきた演劇研究においては、西洋近代演劇の制度をモデルとした日本の近代演劇制度の創設が、文明化された国民の教養と娯楽のために、近代的な「帝国劇場」を建設し、「女優」を誕生させる、一種のナショナル・プロジェクト（帝国のプロジェクト）であったことを明らかにした（池内2008『女優の誕生と終焉—パフォーマンスとジェンダー』）。近代演劇のテキストと身体が、文明化、帝国主義的文化統合に伴う性規範や言説と関わってどのように構築されたかについて考察している。

この研究において、日本帝国のプロジェクトとしての近代演劇が、西洋列強の帝国主義や植民地主義、オリエンタリズム、ジェンダーと交差する中で、複雑に錯綜する政治性を持ちつつ

成立することを明らかにしたが、植民地化された韓国と台湾において、西洋あるいは帝国宗主国日本からもたらされた近代演劇がどのように受容され、独自の演劇表現を生み出したかについては調査することができなかった。1910年代の日本の近代的演劇運動を担った島村抱月・松井須磨子の芸術座や、その後の1920年代の小山内薫たちの築地小劇場に、韓国や台湾からの留学生が新劇を学び、植民地に持ち帰って新劇運動を始めたことはこれまでの国内外の先行研究によって明らかになっているが、帝国宗主国日本と植民地期の韓国・台湾に廻流したドラマの内容や身体表現に則して、近代的ジェンダー、セクシュアリティがどのように構築されたかということに踏み込んだ研究はされていない。

たとえば、1910年代半ば、島村抱月・松井須磨子の芸術座は、「満韓に落つ」と嘲笑されながらも、当時の韓国、台湾、満州、ウラジオストックまで渡り、トルストイの「復活」などを巡演しているが、「転落し裁かれた娼婦」であるヒロインの更生、家長長制的な性規範との葛藤のメロドラマが、植民地台湾・韓国における観客の性規範や意識にどのように作用したかということについて、これまでの演劇研究においては明らかにされていない。また明治後期のベストセラー小説、尾崎紅葉の『金色夜叉』は、日本の新派劇として舞台化され、上演を重ねているという研究（井上理恵2007）があるが、植民地における上演内容や形式についてはまだ研究されていない。この小説は、近代的ジェンダー規範に拘束される新興市民階層の恋愛・結婚意識をテーマとするもので、植民地の韓国・台湾でも大衆的な人気を博し、舞台化・上演されており、文明化、帝国主義的文化統合に伴う性規範や言説の力を検証するために、当時の植民地の資料を収集し、帝国宗主国と植民地における小説・演劇の廻流と変容について比較考察する必要がある。

ベストセラー小説やポピュラーな伝説の舞台化、映画化は、宗主国日本発のものもあれば、植民地韓国・台湾発のものもあり、それが帝国内を廻流する文化表象となっている。帝国宗主国と植民地を横断する文化交流は、非対称的な権力関係に規定されながらも、必ずしも宗主国からの支配的一方向的な交流ではなく、その回路は、予想以上に、双方向的かつ混濁的な文化交流に開かれていたということが、最近の国内外の帝国主義、植民地主義の批判的文化研究において明らかにされつつある。

国内においては、ポストコロニアルの身体として台湾の言語や文学、映画を論じる研究（丸川哲史2000）、植民地における日本語や作文教育の流れをたどり、戦中だけでなく戦後にも続く「言語帝国主義」の系譜を浮き彫りにする研究（川村湊1994、2000）、文学の植民地主義を近代朝鮮の風景と記憶を通して再考する研究（南富鎮2006）、文学・メディア・文化を台湾の「大東亜戦争」の文脈に開いて読む（藤井省三・黄英哲・垂水千恵2002）研究などがその例である。大東亜戦争中の台湾原住民の娘による帝国への犠牲的な奉仕の話『サヨンの鐘』の廻流・変容については、演劇上演（1941）の研究（下村作次郎2002）や、映画化（1943）の研究（四方田犬彦2000、2002）において帝国／植民地主義の批判的視角から分析されているが、ジェンダーの批判的視角からの考察は不十分である。

海外における最近の研究では、植民地期台湾の日本語文学について大日本帝国のクレオール性を検証した研究（フェイ・阮・クリーマン2007）が上げられるが、ポストコロニアルの批判的視角からの植民地文化研究は、90年代以降、着実に蓄積されてきていることがわかる。本研

究では、これら優れた先行研究に学びつつも、先行研究において十分に活用されていなかったジェンダーの批判的・理論的な視角から、帝国・植民地文化研究とジェンダー研究を交差させ、この三地域に廻流する文化表象、物語や身体表現、映画メディアの表現をより重層的にとらえ直すことを目指す。

その場合、植民地に伝わる古典的な伝説や物語、たとえば、韓国の『春香伝』や、台湾の『サヨンの鐘』の再物語化や、舞台化と映画化についても再考する必要がある。さらに、植民地において新たに書かれた作品の舞台化、映画化について歴史的な一次資料を調査発掘することによって、そうした文化創造の場において、テキストと身体が、文明化、帝国主義的文化統合に伴う性規範や言説と関わってどのように構築されたかについてより掘り下げて考察する。

とりわけ、これまでの日本近代演劇研究において不十分であった、帝国主義・植民地主義研究の批判的視角とジェンダー研究の批判的視角を交差させながら、演劇だけでなく、物語や映像表現メディアを通して、帝国と植民地双方に通底する近代的個人のジェンダー化された主体と身体、セクシュアリティの構築過程を明らかにする。

また、これまでの先行研究では、帝国主義・植民地主義最盛期の19世紀後半から第二次大戦終結までの時期の文化について研究する場合、日本帝国なら日本、植民地の韓国なら韓国、台湾なら台湾というふうに、どちらかといえば、一国の文化を通時的な歴史的形態として、近代国民国家の発展の枠組みに閉じた視点から分析考察するものが多かったが、当時の日・韓・台の地政学的な関連を切り離すことなく、共時的にとらえ直す文化研究モデルを提示することを目指している。

帝国宗主国と植民地である三地域に廻流し混淆する文化の創造と交渉の場が開かれていたことを明らかにすることで、宗主国と植民地に通底するモダニズムの再考にも繋がる。すなわち、予想される本研究の結果と重要な意義の一つとして、本研究が、一国における「モダニズムとジェンダー」のテーマで蓄積されてきたこれまでの文化研究成果を問い直す射程を持っているということである。

また、日・韓・台といった国民国家の枠組みに囚われない視角からの帝国・植民地文化研究は、先述したように、帝国による植民地統合・支配という非対称的な力関係の中で、三地域の共時的連関性、緊密であると同時に相克に満ちた交渉があったことを検証するものであるが、それは、戦後の日・韓・台のそれぞれの国民国家的な発展や脱植民地化過程の諸問題を無視するものではなく、むしろ、戦後のそれらの諸問題を逆照射する共時的かつ批判的な文化研究モデルとなることが期待できる。

以上が、私たち科研プロジェクトの研究で設定したテーマと研究の視角、方法であるが、今回の国際言語文化研究所連続講座のメインテーマ「歴史のなかの感覚変容」は、そうした私たちの科研プロジェクトと関連させて考察を深めることができる魅力的なテーマであると考えた。

まず、今回の連続講座における梁仁實の研究発表は、韓国の古典的物語『春香伝』を取り上げた。梁は、韓国出身のメディア表象の研究者であるが、これまで日本のテレビや映画メディアにおける在日の表象や、韓国の植民地期以降の映画について研究を進めてきた。

『春香伝』は、朝鮮半島に古くから伝わり朝鮮の人々に愛されてきたパンソリの物語であるが、

帝国日本にも伝わり、何度か劇化、映画化もされ、帝国と植民地双方に廻流する文化交流現象の中心的な位置を占める。

梁論文は、朝鮮における『春香伝』が広く民衆に愛された古典であるとともに、時代によって多様な読みに開かれたテキストとして再生産されていく変容の歴史を明らかにしている。また、先行研究をていねいに概観することで、『春香伝』が朝鮮と日本帝国内地をつなぐ文化交流のツールであること、その文化的廻流に関する興味深い情報を再確認している。たとえば、19世紀後半に、朝鮮に暮らしたことのある半井桃水が『春香伝』を日本に紹介したという事実や、20世紀初めに雑誌『太陽』に「朝鮮の文学 春香伝の概略」が掲載されているという事実、20年代には朝鮮において日本語で発行されていた雑誌『朝鮮』に京城帝国大学で国文学を教えることになる人物による戯曲『春香伝』が掲載されているという事実、30年代末には、ある日本の演出家が日本人女性の踊り手を京城に派遣し、朝鮮レビューを製作したいと準備していたという事実、そして40年代初めには東京宝塚が芸術座において『春香女伝』を上演しているという事実などが、すでに先行研究によって明らかにされていることに触れている。

梁論文は、20年代から30年代にかけて発達する映画メディアにおける『春香伝』をめぐる日本と朝鮮の文化交流、とりわけ、村山知義の『春香伝』に関する映画企画に焦点を当てた。村山知義は、20年代から前衛的な舞台芸術を中心に活躍した演劇人であるが、30年代後半には、新協劇団で『春香伝』を舞台化している。その日本語による『春香伝』は、日本内地だけでなく、朝鮮各地で上演されたという。その後、朝鮮発の映画企業である朝鮮映画株式会社は、村山を監督として招聘し、『春香伝』を映画化しようと企画したが、この映画化は実現しなかった。梁論文は、村山と朝鮮の映画人の共同企画に込められた「『春香伝』を以て内地や満州にも移出できる作品を作りたいという欲望」を植民地末期の映画をめぐる議論とかかわらせて読み解いており、きわめて興味深い論考となっている。

古典的な恋愛物語である『春香伝』は、植民地末期に、植民地下を背景とした映画『半島の春』のなかの劇中劇の枠組みを通して映画化され、村山や張赫宙が図っていた「世界」への進出に「成功」した、という梁の指摘は重要である。「朝鮮初の映画企業であった朝鮮映画株式会社で映画化されなかった『春香伝』は、映画統制が厳しくなっていくなかで、「国策会社」ともいえる朝鮮映画配給会社によってようやく満州へと移出されていた」という読みである。同時に、私自身は、帝国の国策映画作りの文脈にそくして採用された恋愛物語『春香伝』の劇中劇の枠組みが、映画『半島の春』のテーマと構成に及ぼす効果、意味合いについて、もう少し掘り下げて考察してみたいと考えている。

台湾の研究者で、現在、台湾の淡江大学で教鞭をとっている李文茹は、「近現代日本及び台湾文学における植民地言説」をテーマとして研究を進めており、著作・論文に、『帝国女性と植民地支配——1930～1945年における日本人女性作家の台湾表象』（博士論文2005）のほか、「植民地・戦争・女性—探訪戦時真杉静枝台湾作品」（台湾：『台湾文學學報』12, 2008）、「南方憧憬と帝国男性的なオリエンタリズム—台湾原住民族の表象をめぐって」（韓国：『日本学』27, 2008）、「台湾原住民女性の「声」として語ること」（日本：『社会文学』27, 2008）などがある。

今回の連続講座では、李は1930年代の^{ミンソング}閩南語流行曲に注目し、「植民地台湾で歌われたモダンと自由恋愛」について研究報告を行った。20年代後半から30年代にかけての恋愛と、モダン

と文明、家族制度などとの関係がどのように語られたか、またその語られ方からどのような変容が見られるかについて考察する際に、台湾島内で7割を占めている漢民族のあいだで親しまれる閩南語^{ミンナンゴ}の歌謡、特に当時の流行曲に焦点を当てながら分析を行うもので、ユニークな論考となっている。

台湾社会に輸入されたモダン、モダンティあるいは近代化という用語は、閩南語^{ミンナンゴ}ではどのように言い表されたのか。台湾社会において、主に語られ、書かれる言語としてだけでなく、映画の主題歌やポピュラーな歌謡曲として人々の生活に浸透している言語である閩南語^{ミンナンゴ}、その語彙、リズムなどに注目する研究には一定の先行研究の蓄積があるが、それを活用しつつ、李論文は、いくつかの当時流行した歌謡曲の歌詞とその内容を考察している。1929年の歌謡曲『烏猫烏狗歌』は、モダンガール、モダンボーイの自由恋愛を取り扱っているが、旧慣である結納金制度（聘金^{ビンギン}）に追いつめられた二人の自殺という悲劇について、結納金制度や保守的な家制度を批判したりするよりは、青年達の未熟さと親不孝に焦点を当てたものであると分析している。この曲は台湾歌謡の伝統的なスタイル、いわば7字調の唸歌の形式となっている、と指摘するのも、李は忘れていない。伝統的なスタイルのリズムや形式で、新しい思想を歌うことは困難であろう。

その他、30年代には、映画とタイアップし、映画宣伝用に制作された歌も作られ、レコード産業の隆盛により、ヒット曲が大量に生産されるが、題材が自由恋愛や女性の近代的自我の確立から、異性を待ちわびる女性の受身的な心情を歌うものに変化していくこと、同時に、戦争の進展につれて、恋を歌った閩南語流行曲は次第に姿を消していくことが、指摘されている。30年代半ばには、レコード取締規則が公布され、1937年に日中戦争が勃発してから皇民化運動が厳格に実施され、閩南語歌謡は1939年に発禁になる。「軍歌と時局歌謡期」の時代、閩南語歌謡のメロディに乗って流れてくるのは日本語の軍歌の歌詞だったという歴史的事実に、私たちはあらためて衝撃を覚える。

大西仁は、日本近代文学研究者であるが、明治期の政治小説について研究してきた。現在、台湾の東海大学日本語文学系において日本文学について講義を担当している。最近では、明治最初の牡丹社事件を題材に「小宮山天香『征臺遺聞 看護婦人』について」（2008年11月15日台湾日本語言文藝研究學會第8回定例學會）という論考を発表している。

大西は、この連続講座では、台湾植民地期における台湾人作家による日本語で書かれた近代小説における結婚、恋愛に焦点を当てた研究発表を行った。

大西は、「恋愛」を、「社会制度からの解放」を意味するものと捉え、この視点から、あるいはこれに批判的な視点から台湾の結婚制度を問題化した1920-30年代前半の小説を4作品取り上げている。いずれの作品も、「家・両親に決められた結婚を拒否する」ことがストーリーの中で重要な要素となっている。

「自由恋愛」を「社会制度からの解放」を意味するものとして謳った最も早い時期の小説として、まず、1922年に発表された追風（謝春木）の「彼女は何処に」（『台湾』（1922.7-10）連載小説）を取り上げている。この小説は、家に決められた結婚と、自由恋愛の衝突を描いているが、自由恋愛を貫いた婚約者に破約された女性を主人公として描いている。その女性主人公は、破約を婚約者の責任に帰すことなく、「全く社会制度」、「媒酌制度」、「家庭専制」の罪であると述べ、

彼女と同様の境遇にある台湾女性のために戦う意志を示しており、ここでは、自由恋愛が、「結婚制度」「社会制度」への「革命」として価値づけられている。しかし、同時に、この小説には、「自由恋愛」が、内地に滞在する特権的な留学生の専有物であるとみなされていたことに対する諧謔的視点もあることを、大西は読み取っている。

30年代に入ると、「彼女は何処に」におけるような、自由恋愛・自由結婚が無条件で人間の解放を意味する視点は、ほぼ消失するという。「首と体」(巫永福・1933)は、東京での自由恋愛を、郷里からの結婚の催促によって断ち切られる留学生の苦悩を、「争へぬ運命」(林輝焜・1933)は、自由恋愛を主張し、実践した男性の結婚の失敗を描くことで、台湾におけるその不可能性を述べている、と大西は考察している。

さらに「婚約奇談」(呂赫若・1935)においては、家の決めた結婚を拒否する女性の動機が、自由恋愛ではなく、社会主義運動に変わっていて、ここでは、恋愛は「ブルジョアが行なうもの」だという語られ方をしていることに注目している。一連の作品を「個人の解放」に関する思想の変遷と捉えることが可能であれば、つまり、1922年には、恋愛そのものが政治的イシューであったのが、後には、政治問題ではなくなり、「結婚制度からの解放」は、階級運動に取って代わられる、と大西は概観している。恋愛や結婚を「ブルジョワが行うもの」という語られ方は、それ自体政治性を伴う主張であり、階級的な問題であることを否定的に言い切る語り方でもある。

大西自身が、呉天賞の「龍」や、「争へぬ運命」(林輝焜)、「婚約奇談」(呂赫若)の読みで試みたように、恋愛小説における感覚の変容は、30年代後半の日中戦争勃発、社会主義運動の高揚、日本帝国／植民地関係を貫く皇民化運動の強化といった歴史的な脈にそくして、より重層的にとらえ直し、読み直す必要があるだろう。

私たち科研プロジェクトグループは、今回、連続講座という貴重な研究発表の場が与えられたことに感謝している。以下に収録するのは、梁、李、大西の各氏が発表した報告をもとにして、報告者それぞれが論文としてまとめたものである。